

KAMPU BULLETIN

February
2026
No.56

2

KANAGAWA ASSOCIATION OF MEDICAL PROFESSIONAL UNIONS

構成団体

(公社)神奈川県放射線技師会 (公社)神奈川県臨床工学技士会
(一社)神奈川県臨床検査技師会 (公社)神奈川県栄養士会
(公社)神奈川県理学療法士会

SPECIAL
ISSUE

「最近のトピックス」 ～各団体における現況や動向、最新技術について～

巻頭言

連携と進化で未来を切り拓く —診療報酬改定2026年に向けて—

神奈川県医療専門職連合会 会長 田島 隆人



皆さん、こんにちは。2025年・2026年度の2年間、会長を務める放射線技師会の田島です。どうぞよろしくお願いいたします。

私たち5団体（放射線技師会、臨床工学技士会、臨床検査技師会、栄養士会、理学療法士会）は、患者さんの生活を支える専門職の連合体です。機器、検査、栄養、運動機能、画像、それぞれが専門性を磨き、チームとして一体となることで医療の質は初めて最大化されます。

さて、2026年は私たちにとって大きな節目の年です。診療報酬改定2026年が目前に迫り、医療のあり方がさらに進化しようとしています。今回の改定では、本体報酬+3.09%と30年ぶりの大幅プラス改定、賃上げ対応として+1.70%の配分が示されました。物価高騰や人材確保の課題に正面から向き合う改定であり、現場で汗をかく私たち専門職の価値を社会が改めて認めた、そんな実感を持てる年でもあります。

中央社会保険医療協議会では、改定のキーワードを「タスクシフト・タスクシェア」と「アウトカム評価」として議論されています。医師・看護師の負担を軽減しつつ、私たちが専門性を活かして主役として関与する場面が確実に増えます。例えば、診療放射線技師はIGRT（画像誘導放射線治療）の運用や品質管理の高度化、臨床工学技士は病院全体の機器安全管理・データ連携のハブとしての役割拡大。臨床検査技師は迅速検査からAIによる判読支援までを一気通貫で担い、管理栄養士は栄養サポートチームと病棟での連携を強化し、理学療法士は「単位を積む」から「生活機能を戻す」へ、成果を説明できる介入へと舵を切ります。同時に、アウトカム評価が本格化します。ADL改善、在宅復帰率、再入院の低減、栄養状態の改善、機器トラブルの減少——こうした“患者の変化”が、点数と直結していく流れで、議論を進めています。人数や配置だけでは評価されず、チームで結果を出す医療へ。つまり、私たちの連携の質そのものが価値になります。では、現場で何を準備すべきでしょうか。

【現場での準備ポイント】

1. 業務範囲の再確認と役割分担の明確化
手順書とプロトコルを整え、誰がどこまで担うかを明文化。合意形成が安全と効率を生みます。
2. 研修・スキルアップの計画
IGRT、機器安全管理、AI活用、アウトカム評価など、職種別に必須テーマを年度計画に落とし込むことが重要となります。
3. アウトカム指標の把握と記録体制
ADL、栄養、機器稼働、検査TATなど、指標の定義を統一し、記録様式を院内標準に。データは“語る物語”に。
4. 多職種カンファレンスの質向上
目的・議題・担当・期日を固定し、意思決定とフォローを可視化。算定要件と業務改善を両立させます。
5. 改定情報・DXの継続キャッチアップ
各職種団体や連合会・学会の最新情報を共有し、電子カルテ・レセプトの運用に反映することで、請求漏れを防ぎます。

2026年は、私たち専門職がより主体的に医療に関わるチャンスのある年です。変化を恐れず、連携を強化し、患者さんの笑顔を守るために一歩踏み出しましょう。連合会としても、横の繋がりを強化し、新たな情報・事例の共有、DX支援を通じて皆さんの挑戦を後押しできればと思います。未来は、私たちの手の中にあります。現場から始める小さな改善を積み重ね、連携の力で、より良い医療を創っていきましょう。

「最近のトピックス」 ～各団体における現況や動向、最新技術について～

職業体験イベント「いのちを支えるエンジニア」 —未来の医療人材育成に向けて—

昭和医科大学 統括臨床工学室 技士長 大石 竜
(公益社団法人 神奈川県臨床工学技士会)

公益社団法人神奈川県臨床工学技士会では、2025年8月23日(土)、そごう横浜店9階センタープラザにて、臨床工学技士の職業体験イベント「いのちを支えるエンジニア」を開催しました。本イベントは、臨床工学技士という医療専門職の魅力を広く社会に伝えるとともに、次世代の医療人材育成を目的とした取り組みであり、今回で3回目の開催でした。

初回は2018年にクイーンズスクエア横浜(みなとみらい)、2回目は2019年に今回と同じ横浜そごうで開催し、いずれも多くの児童・生徒・保護者にご参加いただきました。2020年以降は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面型イベントの開催が困難となり、長らく中断を余儀なくされていましたが、今回の開催は実に6年ぶりの再開となり、関係者一同にとっても感慨深いものとなりました。

当日は、小学生から高校生まで幅広い年代の参加者が来場し、透析装置、内視鏡装置、人工呼吸器、生体情報モニ

タ、人工心肺装置などの医療機器に実際に触れながら、臨床工学技士の役割や医療現場での業務について、実際に医療機器に触れてもらいながら体験的に学習してもらいました。また、展示ブースでは実際の医療現場を模した機器配置や、血液循環を模擬した装置なども用意され、参加者の関心を集めました。

参加者数は300名を超え、当会スタッフが機器の説明や操作支援を丁寧に行った結果、参加者からは「医療の裏側を知ることができて面白かった」「将来、臨床工学技士になりたい」といった声が寄せられました。さらに、保護者からは「医療職の選択肢として臨床工学技士を知る貴重な機会だった」や「是非、来年も開催して欲しい」との声が多く寄せられ、医療職の多様性と専門性を伝える場としての意義が改めて確認されました。

今後も当会では、地域社会との接点を広げながら、臨床工学技士の認知度向上と人材育成に継続的に取り組んでまいります。



更なる飛躍へ、国際規格に準じた臨床検査室マネジメントシステム ～臨床検査室に特化した ISO15189 第 4 版 (2022 版) への移行～

横浜市立大学附属病院 臨床検査部 技師長 矢島 智志
(一般社団法人 神奈川県臨床検査技師会)

医療分野には多くのガイドラインや国内基準が存在しているが、それらは国や地域ごとに異なるため、国際的な整合性を確保することは容易ではありません。その中で、ISO 15189 は、ISO 9001 の品質管理の考え方と ISO/IEC 17025 の試験所認定要求を基盤に臨床検査室に特化した品質と能力に関する国際規格として位置づけられている。この規格は医療特有のリスク管理や患者中心のアプローチを取り入れ、検査結果の正確性と信頼性を保証し患者安全を確保する包括的な要求事項を定めている。これは、医療領域において唯一の国際標準規格であり、臨床検査室の品質保証と技術的能力を統一的に評価する枠組みを提供し、国際的な医療連携や検査結果の相互承認を実現する上で不可欠な役割を果たしている。特に、グローバル化が進む医療環境において、ISO 15189 は検査室の品質保証の基盤を支える重要な規格である。

しかし、日本国内の取得率は世界的から見ても依然として低く、神奈川県内では 94 施設（衛生検査所 15 施設、一般病院 79 施設）のうち取得施設は 19 施設にとどまっている。課題としては、認知度の低さ、各施設の役割による必要性の差、経済的負担・管理業務の増加などが挙げられ、特に中小規模の施設では大きな障害となっている。今後の取り組みを含め課題の改善が期待される（図 1）。

ISO15189 は 2003 年に初版が発行され、2007 年版ではリスク管理や患者安全の概念が強化され、2012 年版では継続的改善や試薬管理の要求が追加された。最新の 2022 年版では、ISO 9001: 2015 に基づくリスクベースの考え方を導入したリスク評価と予防的対応の強化、マネジメントシステム活動記録の保持から監視および評価の追加、ISO 22870: 2016 の POCT（ポイントオブケア検査）の統合、ISO IEC 17025: 2017 との整合性の明確化、情報セキュリティ・データインテグリティの拡充を重視した改定となった（表 1）。移行審査は ILAC が定めた 2022 年 12 月 6 日から 2025 年 12 月 31 日の 3 年間で世界各国の施設が継続認定を取得することになっている。以上を踏ま

え、昨年 12 月末で移行審査は終了し、新規取得は 2023 年 7 月頃から開始され現在に至っている。

国内では、2018 年に施行された医療法改正により、検体検査の標準化および品質保証を含むマネジメントの基準が法的に整備された。この改正は、医療の質向上、検査品質保証、経費削減、さらに医療 DX 推進を目的とした取り組みであり、ISO 15189 は第三者認定の一つとして注視されている。ISO 15189 を取得していない施設に於いても、改正医療法に準じた検査品質マネジメントを維持するため、ISO 15189 の要求事項を参考に活用することは有意義であり、推奨したいと考える。

図 1 : ISO15189 概要と 2022 版改定



表 1 : ISO15189 改定比較

年版	主な改定内容
2003	初版発行
2007	リスク管理・患者安全強化
2012	継続的改善・試薬管理追加
2022	リスクベース導入、POCT 統合、情報セキュリティ拡充 活動記録保持から監視および評価を追加

関連 ISO 条項: 4.1 (マネジメント責任)、7.3.7.2 (リスク管理)、8.5 (改善)

神奈川県栄養士会医療事業部 市民公開講座報告 「楽しく学んで備えよう!!～食事編～」

南大和病院 栄養部 依田 理恵子
(公益社団法人 神奈川県栄養士会)

神奈川県栄養士会医療事業部では、地域住民の健康と食生活を支えることを目的に、年に一回、市民公開講座を企画しています。本年度は「災害時に役立つ備蓄や非常食」をテーマに掲げ、横浜防災センターとの初のコラボレーションによる防災イベントを開催しました。

横浜防災センターは、地震や火災、風水害などの災害を模擬体験できる施設であり、災害発生時の対応を学ぶことができます。今回の公開講座では、同センターでの体験を通じて市民の皆様へ災害への心構えを促すとともに、栄養士会として「備蓄食の重要性」や「非常時の食事の工夫」について情報を発信しました。災害はいつ起こるかわからないからこそ、事前の準備が大切であることを改めて考える機会となりました。

イベントの目玉のひとつが「パッククッキング体験コーナー」です。パッククッキングとは、耐熱性のポリ袋に食材を入れ、袋ごと湯煎する調理方法で、災害時に非常に有効です。加熱に使用した水を再利用できること、食器を汚さず衛生的に食事ができることなど、多くの利点があります。しかし実際に体験したことのある方はまだ少なく、今回は日本栄養士会災害支援チーム（JDA-DAT）のメンバー

による実演動画を視聴しながら、参加者が実際に模擬調理を体験できるブースを設けました。作業のポイントを丁寧に伝えることで、参加者からは「非常時でも工夫次第で温かい食事ができることを知った」との声が寄せられました。JDA-DATは、専門的な研修を受けた栄養士が組織する災害支援チームであり、大規模災害発生時には医療・福祉・行政と連携し、緊急栄養補給物資の提供や食生活支援を行います。今回の公開講座では、その活動を市民に紹介することで、災害時における「食の支援」の重要性を広く理解していただく機会にもなりました。

さらに「備蓄一日分体験コーナー」では、実際に一日分の備蓄食を展示し、どのような食品を揃えておくべきかを学べる場を提供しました。参加者は「思った以上に多くの食品が必要だとわかった」「家族構成に合わせた備蓄を考えたい」といった感想を述べ、日常生活に直結する学びを得ていました。

今回の市民公開講座は、防災体験と食の知識を組み合わせることで、災害への備えをより身近に感じてもらうことを目的としました。栄養士会として、食を通じて地域住民の安心・安全を支える活動を今後も継続してまいります。



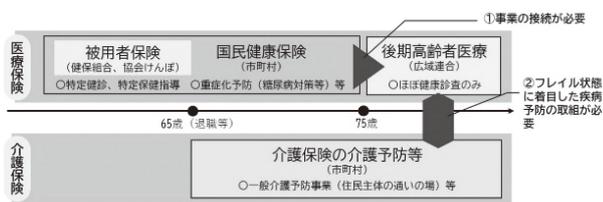
横浜市「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施事業」

株式会社リカバリータイムズ 代表取締役 石田輝樹
(公益社団法人 神奈川県理学療法士会)

① 生活機能低下の“兆し”に介入する

高齢者医療の課題は、疾患治療で完結する時代だけでなく生活機能維持・低下予防へ軸足を移しつつあります。本事業はその転換を具現化する取り組みであり、医療と介護を分断せず、生活の場まで視野に入れた支援体制の構築を目的としています。

本事業は後期高齢者健診データ（KDB）等を活用し、75～84歳の高齢者の中からフレイルや生活機能低下リスクを有する対象者を抽出します（下図）。



その上で、通いの場・通所型支援・個別的支援という3層構造で適切に介入し、重症化や要介護状態への移行を未然に防ぐ仕組みとして整備されました。従来の「参加できる人が来る介護予防」から「必要に応じた専門職が関わる予防」を加えたのが本事業の特徴です。

② 当会と横浜市の取り組み

当会は、横浜市と連携し、事務局機能を有し、かつ本事業における理学療法士の派遣・育成・支援体制の構築を担います。理学療法士は、通いの場では地域活動を支える住

民に対し助言等の役割を担い、質の向上を後方から支援します。

通所型支援では、KDBにより抽出されたハイリスク高齢者を対象に、2か月間行うスポーツジム等で行う教室にて初回と最終回評価で生活上の課題抽出とワンポイントアドバイスを行います。さらに個別的支援では、自宅に伺い、身体機能のみならず生活背景や動作環境まで含めた評価を行い、具体的な改善方策を提示します。運用をしていく中で、横浜市と事前研修や記録様式の統一、定期的な意見交換等を通じて、支援の質を地域全体で担保しています。

③ 今後の展開と展望—2026年度全18区展開に向けて—

本事業は2024年度に先行3区・2025年度には10区において段階的に展開されて、2026年度には横浜市全18区での本格実施が予定されています。その実現に向けては、専門職派遣体制の安定化と質の向上、研修・情報共有環境の整備、区ごとの運用差を調整する仕組みづくりが重要となります。当会としては、理学療法士が地域で継続的に専門性を発揮できる環境整備に努めるとともに、横浜市と協働しながら、生活機能低下の“兆し”に介入する地域医療モデルの定着を目指していきます。一体的実施事業は、理学療法士にとって新たな実践の場であると同時に、これからの高齢者医療の方向性を示す重要な取り組みになると考えています。

AI時代における「英知協働」 —診療放射線技師の立場から—

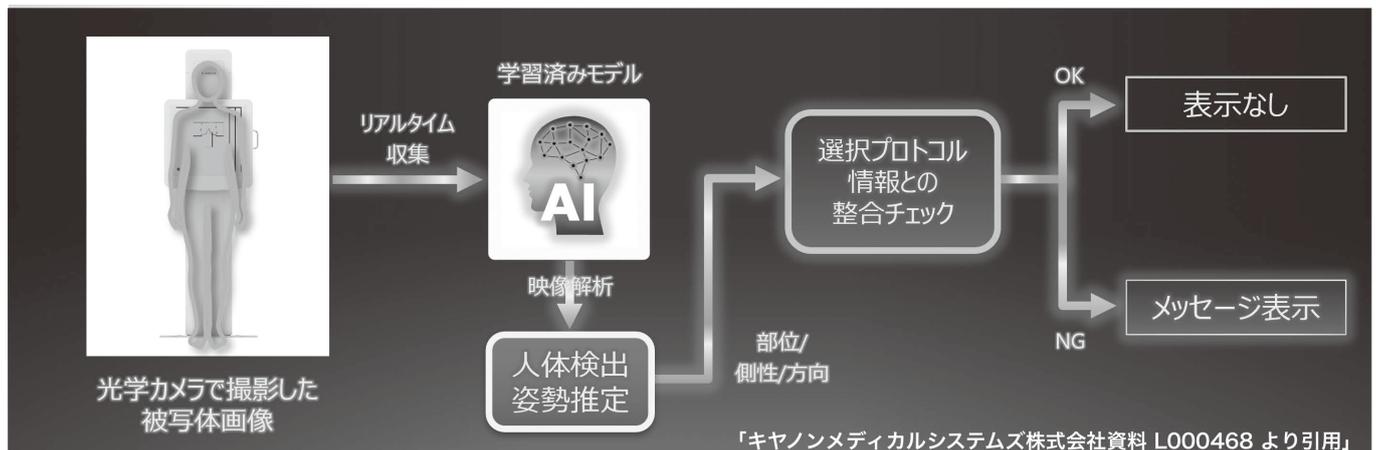
川崎市立井田病院 医療技術部 放射線技術科 小菅友也
(公益社団法人 神奈川県放射線技師会)

近年、診療放射線技師の業務においても、AI技術の活用が浸透しつつあります。一般撮影装置では、撮影ポジショニングのチェックや再撮影の判断が可能となり、検査の均一化や安全性の向上、再撮率の低減に寄与しています。また、X線動態撮影データをAIで解析し、造影剤を使用せずに肺の血流欠損を評価する技術も期待されています。さらに、深層学習を用いた高速再構成技術は各モダリティへと広がり、画像の質を保ちながら患者負担を軽減する技術として活用が進んでいます。CTでは低線量と高分解能の両立、MRIでは短時間撮像と高SNRの確保が可能となりました。病変検出支援や臓器セグメンテーション、定量解析の自動化も進み、診断の再現性向上と業務効率化を後押ししています。放射線治療領域においても、自動輪郭抽出や線量計画最適化が進展し、標準化と省力化の流れはより明確になってきています。これらの技術は、従来の「補助」の域を超え、すでに「業務プロセスの中核」へと位置づけを変えつつあります。AIは単なる便利な道具ではなく、医療現場における判断や業務の在り方そのものに影響を与える存在となり始めています。この変化は、診療放射線技師に限らず、臨床検査技師、臨床工学技士、理学療法士、管理栄養士など、

AIを活用するすべての医療専門職に共通すると考えます。重要なのは、AIに業務を置き換えられるかどうかという視点ではなく、人が培ってきた知識・経験・判断力と、AIの持つ解析力・処理能力をどのように組み合わせ、共に活かしていくかという姿勢であり、私はこの関係性を「英知協働」と捉えています。

世界に目を向けると、AIは医療分野にとどまらず、社会構造全体にも大きな影響を及ぼしています。米国では、大手企業においてAIによる業務自動化を背景とした大規模な人員削減が報じられるなど、雇用構造の変化が顕在化しています。さらに、AI投資の主軸はロボットに搭載される「フィジカルAI」へと移行しつつあり、将来的には人型ロボットが現業職を代替する可能性も現実味を帯びてきました。ホワイトカラーのみならず、ブルーカラー領域の一部も「置き換え可能な領域」へと変化しつつあるのが現状です。

診療放射線技師は、知的判断と現場実務の双方を担う、いわばホワイトカラーとブルーカラーのハイブリッド専門職です。この特徴は、他の多くの医療専門職にも共通しています。AI時代において職業としての価値を維持・発展させていくためには、プロトコル設計、質管理、定量評価、



被ばく管理といった高度化が進む領域において、専門性をもって主体的に関与し、チーム医療の中でその役割を果たしていくことが求められます。また、生成AIのハルシネーションは近年大きく改善し、専門領域での活用範囲も拡大していますが、無批判な依存は新たなリスクを生む可能性も否定できません。AIの特性と限界を理解したうえで、安全かつ適切に活用する能力は、すべての医療専門職にとって今後さらに重要となるでしょう。

AI活用の標準化や質保証の在り方、そしてフィジカルAI時代における専門性の再定義は、医療専門職全体が未来に

向けて取り組むべき重要な課題です。技術革新を脅威として捉えるのではなく、患者利益の最大化へとつなげていくことこそが、私たち医療者に求められる姿勢です。神奈川県放射線技師会は、医療を支える専門職の一員として、「英知協働」という考え方を軸に、現場の声を反映した活動や情報発信を進めてまいります。AI時代においても診療放射線技師が専門性を発揮し、他職種と協働しながら医療の質向上に貢献できるよう、その指針を示し続けていきたいと考えています。

総会報告

●第31期 定時総会

2025年6月16日(月) 18時30分～18時53分

横浜情報文化センター 6階 情文ホール

代議員総数 66名

有効代議員数 43名(出席代議員 22名、
委任状提出 21名)

議 題：

- ・2024年度 事業報告および決戦報告について 承認
- ・2025年度 役員改選について 承認
- ・2025年度 事業計画および予算案について 報告

表 彰

・功労表彰

神奈川県臨床工学技士会 小林 剛志

総会時講演

・医療機関におけるカスタマー(ペイシエント)ハラスメントの対応

TMI総合法律事務所 阿部 洸三、堀田 陽平、
梶原 大暉(弁護士)

2025 年度 活動報告

●ハローよこはま 2025

- ・2025年11月9日(日) 象の鼻パーク(横浜市中区) ブース出展(神奈川県臨床検査技師会、神奈川県栄養士会、神奈川県放射線技師会)

●公開セミナー・職能セミナー

- ・2026年2月28日(土) 17時30分～20時40分
神奈川県民センター2階ホール

○公開セミナー

「構造学的心疾患における最新の知見と医療の重要性」
講師：横浜市立大学附属市民総合医療センター
心臓血管センター 菊地 進之介 先生

○職能セミナー

「災害対策について」

演者：(公社)神奈川県臨床工学技士会 岡田 悟
(一社)神奈川県臨床検査技師会 澤畑 良一
(公社)神奈川県栄養士会 依田 理恵子
(公社)神奈川県理学療法士会 下田 栄次
(公社)神奈川県放射線技師会 吉田 篤史

●後 援

- ・2025年7月1日(火)～8月31日(日)
令和7年度 理学療法普及啓発キャンペーン
- ・2025年7月5日(土)～7月6日(日)
2025年度関東甲信越診療放射線技師学術大会
- ・2025年10月15日(水)開催
第44回神奈川県病院学会
- ・2025年11月9日(日)開催
第8回神奈川県臨床工学会
- ・2026年2月1日(日)開催
第42回神奈川県理学療法士学会
- ・2026年2月22日(日)開催
第21回神奈川放射線学術大会
- ・2026年3月21日(土)開催
第8回神奈川県栄養士会 実践・研究大会

●協 力

- ・2025年度関東甲信越診療放射線技師学術大会
タスクシフトシンポジウム シンポジスト協力
(臨床工学技士会、臨床検査技師会)
- ・第44回神奈川県病院学会 運営スタッフ協力

編集 後記

令和7年度もあっという間に過ぎ去り、皆さまにとって充実した一年となったことと存じます。今年度は、技術革新や社会の変化が一層加速した年でもありました。特にAI技術の進化は著しく、医療、交通、教育などさまざまな分野でAIの導入が進み、私たちの生活はより便利で効率的になっています。また、日本で女性初の総理大臣である高市内閣の発足により、政治・経済の新たな方向性が示されました。政策の安定とともに、経済の再活性化やデジタル化推進に向けた取り組みも進められています。特に、行政の効率化や国際関係の強化に期待が寄せられています。私たちも、これらの変化を見据えながら、より良い未来を築くために日々努力を重ねて

いかなければならないと感じております。

さて、今回の会報は、「最近のトピックス」をテーマとし、各団体における現況や動向、また最新技術等についてご寄稿いただきました。

今後も、各団体の活動や最新の取り組みについて情報共有を進めてまいりますので、引き続きご支援とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。令和7年度を振り返るとともに、次なる挑戦に向けて一層の飛躍を誓い、皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

(神奈川県医療専門職連合会事務局 江川)

●広報委員会

委員	豊田 章子	(公社)神奈川県放射線技師会	http://kart21.jp/
	錦織 恒太	(公社)神奈川県臨床工学技士会	https://kanarinko.com
	永井 秀一	(一般)神奈川県臨床検査技師会	http://www.jinringi.or.jp/
	亀山 亜希夫	(公社)神奈川県栄養士会	https://www.kana-eiyo.or.jp/
	相馬 光一	(公社)神奈川県理学療法士会	https://pt-kanagawa.or.jp/

